

「よくなりたいか？」

ヨハネによる福音書5章

1その後、ユダヤ人の祭りがあったので、イエスはエルサレムに上られた。

2エルサレムには羊の門の傍らに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、そこには五つの回廊があった。

3aこの回廊には、病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた。

5さて、そこに三十八年も病気で苦しんでいる人がいた。

6イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、「良くなりたいか」と言われた。

7病人は答えた。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」

8イエスは言われた。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」

9すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした。

この物語について、ある学者は当時の霊的な状況をヨハネが表現していると言っています。

「ベトサダ」「ベテスタ」という名前は「恵みの家」という意味があります。

その恵みの家のまわりに五つの回廊があったとありますが、学者たちはこれはモーセの五書、つまり律法の書のことだといいます。

そしてその回廊には「病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた。」と書かれています。

どういうことかという、恵みの家に連れて行くはずのモーセの五書が律法主義によって機能不全に陥り、病人たちを癒せないばかりか、放置せざるを得ないほどの混乱が起こっているということです。みんな、恵みの家に行って、癒しを受け、養いを受け、神様の恵みを味わいたいと願っているのにその道が閉ざされてしまっている状況がそこにはありました。

そして、その代表格のような38年間も病気で苦しんでいる人がそこに登場します。

イエス様はその人に向かって「良くなりたいか」と声をかけるのです。

するとその人は、絶望的なことを語りますが、それがまさに、問題の中核を突いているのです。こういう会話です。

ヨハネによる福音書5章

3aこの回廊には、病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた。

5さて、そこに三十八年も病気で苦しんでいる人がいた。

6イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、「良くなりたいか」と言われた。

7病人は答えた。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。」

わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」

みんながこの池の周りにいたのは、言い伝えて、
「時折、神の天使がその池にやって来てその水をかき混ぜるのだけれど、その時、最初にその池に入った者はどんな病からも癒やされる」というものでした。
つまり、「一番」になれた人は癒しのご褒美がもらえるような教えです。
そこにいた人たちは、その瞬間を待ち、競い合っていたとも言えると思います。

そして、それが当時の宗教的な世界にも当たり前の風潮だったと思います。
律法は守り抜かねばならない、とにかく、優秀になって、それを守り、それを教え、間違いなく生き抜かねばならないという考え方です。
私が時々使う「機能論的人間観」そのものです。できる人は癒されるけれどダメな人はダメのまま、居場所はありませんよ、という発想です。

この38年間、伏せていた病人は「良くなりたいか」という質問をされたイエス様にこう言いました。

7病人は答えた。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。
わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」

つまり、
私には、わたしを一番にしてくれる人はいません。
それに、自分の力では一番にはなれません。
つまり、絶望しかありません。

なんと悲痛な言葉でしょう。
いちばんになれなければ、癒しが届かない、恵みの家の祝福に与れない。
こんな寂しいことはありません。
でも、社会はそれを当たり前と考えていたでしょうし、宗教社会もそれを当然と思っていたのだと思います。
出来の悪い人たちや病人たちは、神様から呪われているのだという発想もあったと思います。

でも、それを聞いて、イエス様は、その発想を真っ向から否定するように
「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」と命令されました。
そして、その通りにこの病人は床を担いで歩き出したのです。

当時の機能論的人間観に対するイエス様の真っ向からの反対。
神様の心がどこにあるのかが、わかるような癒しの祝福がここにもたらされました。
しいていえば、イエス様は
「あなたが病人であろうが健全な人であろうが、神の前にはあなたのいのちと存在は大事なものだ」
「神にとって、あなたの存在は高価で尊く、その病苦の状況に心も身体も縛り付けられていることを神様は望んでいない」

ということを、表明するような「癒しの出来事」でした。

イエス様は後で、この人にもう罪を犯してはならないと語っていますから、病気と罪との関係については

イエス様は黙っておれなかったのだと思います。

それにしても、機能していない「恵みの家」という池ではなく、イエス様ご自身こそが「恵みの家」そのもの

なのだという事のはっきりわかる、物語になっています。

イエス様は、私たちの能力がどうであっても、関係なく「良くなりたいか」と聞いてくださいます。

絶望状態にいる私たちに声をかけてくださいます。

恵みの家に到達できそうもない、私たちに近づいてくださいます。

そして、声をかけ、手をのばし、存在といのちを尊いものとして、私たちに返してくださるのです。

イエス様が近づいてくださることを歓迎できた時「ベトサダ・恵みの家」に近づくことになるのです。

* * * * *

youtubeでの礼拝映像はこちらです

<https://youtu.be/z0F5YdRIG2Q>